The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルの「パンセ」における予言に関する一考察
Author(s)	森川, 甫
Citation	Gallia. 1961, 7, p. 39-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルの「パンセ」における予言に関する一考察

森　川　　甫

I

パスカルの『パンセ』には，「予言」に関する数多くの断章が見出され，ブランシュヴィックやラフュマたちは彼らの夫々編纂した版[1]において，それらを一つの章にまとめ，パスカルのキリスト教弁証論において重要な役割を与えている．エチエンヌ・ペリエも，ポール・ロワイヤル版『パンセ』の序文で，「パスカルはこの宗教の真理をもろもろの予言によって立証しようとした．彼が他の問題に関してよりも，はるかに詳しく述べたのは，この問題であった[2]」と書いている．

パスカルにとっては，「メシアが信じられるためには，それに先きだつもろもろの予言が存在しなければならなかった[3]」(fr. 571)．そして，「もしも，イエス・キリストがその予言通りに来臨したならば，それだけで無限の力となったであろう」(fr. 710)．然るに，「イエス・キリストは予言されていたすべての状況のもとに来臨した」(fr. 617)．かくして，予言する旧約聖書と，予言の成就を伝える新約聖書が同時に証明されたのであった (fr. 642)．又，予言はイエス・キリストの神性の証拠でもあると云う (fr. 547, 713)．更に，予言はイエス・キリストについての最大の証拠でもあると述べている (fr. 706)．更に又，予言はキリスト教が真の宗教であるための一つの証拠であることを指摘し (fr. 289, 290)，遂には，「私は予言のあるところにキリスト教を見出す」(fr. 693) とさえ云っている．

今，パスカルが，キリスト教の主要な証拠であるとみなしている予言を，次のような順序でとりあげてゆきたい．即ち，1°．『パンセ』における予言の内容，2°．この「予言」の解釈原理がイエス・キリストにあること，3°．「予言」とイエス・キリストの関係，である．

註

(1) *Pensées et Opuscules* (Brunschvicg, Hachette), *Pensées* (Lafuma, Delmas) 等. 但し, Lafuma 版の章分けは,『第一写本』の前半の分類によっている。

(2) Brunschvicg. op. cit. p. 308.

(3)『パンセ』のテクストとしては, *Pensées et Opuscules* (Brunschvicg, Hachette), *OEuvres Complètes*. 14 vol. (Brunschvicg, Gazier, Boutroux. Hachette), *Pensées* (Lafuma. Delmas), パスカル全集, 第三巻 (人文書院) を使用した。『パンセ』の番号は, 便宜上, Brunschvicg 版により, 例えば, (fr. 571) と記した。

II

パスカルにとっては, 予言は次の如くなされた. 「一連の人たちが四千年にわたって, 次から次へとやって来て, いつも変らずに, この同じ出来事を予言しており, ……(中略)……一民族全体がこの出来事を告げ知らせているのである. 彼らは四千年にわたって存続しつつ, 全体として, 彼らがそれについてもっている契約の証人となったのである[(1)]」(fr. 710).

このように, パスカルによれば, 予言は四千年間, 多くの場所で, 多くの予言者たちによって語られてきた. この「四千年」は創造からメシア来臨までの期間を示しており, この期間を四千年とみなしている点は, パスカルの聖書解釈の一つの態度を示すものとして重要であるが[(2)], 本論では, 述べなければならぬ更に重要な問題があるから, この点にはとどまらないで次に進もう.

それでは, パスカルは何が予言されていたというのであろうか. それは, 次の二つ[(3)], 即ち, 1) 個々の事柄に関する予言, 2) メシアに関する予言に分けられる. 個々の事柄に関する予言とは, メシア以外に関する予言で, fr. 711 では, その例として, ヤコブが十二人の息子たちになした予言があげられている. 「ヤコブは死に臨んで十二人の子らを祝福し, 彼らが大きな土地を所有するようになるであろうと宣言した」(fr. 711). 然し, このような「個々の事柄に関する予言」はつねに, メシア予言と結びついて, はじめて真の意味をもつようになる. 「それはメシアについての予言が, 証拠を欠くことのないためであり, 個々の予言が実を結ばないことのないためである」(fr. 712). パスカルの予言の殆んど大部分は, 「メシアに関する予言」であり, このメ

シア予言は，次の二つ，即ち，「時期と仕方」(fr.710) に分けられている．

まず，メシア来臨の時期の場合を述べてみよう． fr.708 では，来臨の時期が，四つの事実，即ち，a）ユダヤ民族の状態，b）異民族の状態，c）神殿の状態，d）年の数，により予言されたとしている (fr.708)．

a）第一に，「ユダヤ民族の状態により予言された」という表現によって何を述べようとしているのであろうか．パスカルは，創世記48章8～13節のヤコブ予言に基いて，ユダヤ民族とメシア来臨の時期の関係について述べている．即ち，ヤコブはイスラエル民族[(4)]の十二部族の，夫々の祖である十二人の息子を集めて，ユダの子孫から他の十一部族を支配する王たちの出ること，しかも，全イスラエル民族の待望しているメシアさえも，このユダ部族から出ること，そして，このメシアが来臨するまで，ユダ部族から王権が取去られないことを予言した (fr.711)．これがユダヤ民族の状態に関する予言である．然しながら，王権がユダから取除かれたのは，メシア出現の時ではなく，イエスが現われる以前に，ユダ部族の支配は終っていた．ユダ部族出身でないヘロデ[(5)]が，ユダの王権を奪って王位についていたからである．パスカルもこの事実を認めて，「ヘロデはユダの王権を奪ったが，ユダの出ではなかった」(fr.753) と述べている．したがって，パスカルは「王権がユダ部族から取去られない」というこのヤコブ予言を，来るべき偉大な王のために王権がユダにおいて保存されているという意味に解釈しているのであろう．

b）次に，「異民族の状態により予言された」という表現によって，何を述べようとしているのであろうか．パスカルは，ダニエル書2章に基いて，しばしば第四王国について述べ[(6)]，第四王国の時に至って，メシアが来臨することを予言する．「第四王国のとき……(中略)……異教徒が教えを受け，ユダヤ人の拝する神を知るようになるであろう」(fr.724)．パスカルはこの予言が成就されたことを認め，「事実，第四王国のとき，異教徒がこぞって神を拝し，天使的生活をする結果になった」(fr.724)[(7)]．然し，ダニエル予言[(8)]が示すこの「第四王国」に関しては，パスカルは多分に未決定である．メシア来臨の時に存続しているというこの「第四王国」が如何なる歴史的現実と一致するかに関しては，大別して三つの解釈，即ち，1）アレキサンダーの後継者，2）ギリシァ，3）ローマ，があるという．1）はスチュアートとツェ

ラーによって支持され，2）は聖書の高等批評家によって支持され，3）は保守派によって支持されている[9]．パスカルはいずれを「第四王国」とみなすかを示していない．

c）第三に，「神殿の状態により予言された」という表現によって何を述べようとしているのであろうか．旧約聖書には，四つの神殿が記されている．第一神殿はエルサレムに建築された最初の神殿であり，「ソロモンの神殿」とも呼ばれた．列王紀略上5，6章はその美しさを詳細に伝えている．この神殿はソロモン王即位の第四年に，工事を着手し（B.C.1019年），七年後に落成し，B.C.586年，バビロン王ネブカデネザルによって焼かれた（列王紀略下25：9～17）．第二神殿は「ゼルバベエルの神殿」とも呼ばれ，ペルシア王クロスの許可を得て，本国に帰ったユダヤ人が建てた．「ダリヨス王の治世の六年に完成した」（エズラ書6：15）．B.C.516年にあたると云われる．第三の神殿は「ヘロデの神殿」とも呼ばれ，第二の神殿完成の約五百年後のB.C.20年に至り，ヘロデ王が第二の神殿の修復に着手し，殆んどこれを新たにし，今迄の神殿よりも美しいものとした．この神殿が完成したのはエルサレム滅亡（A.D.70年）の四，五年前であったと云われる．第四の神殿は「エゼキエル神殿」とも呼ばれ，エゼキエルが異象のうち見た神殿であって，現実の歴史の中に建てられた神殿ではない[10]．以上が旧約聖書における四つの神殿であるが，パスカルは第二の神殿の存続中にメシアが来臨し，異教徒たちにも神殿が開放され，すべての人々がユダヤ人の神を拝するようになると云っている（fr.724）．然し，異教徒がメシアの教えを受け，ユダヤ民族の神を拝するようになったのは事実としても，それは第二の神殿が存続していた時期ではなく，むしろ，第三の神殿が存続していた時期であったと考えるパスカル研究家もある[11]．イエスが生れたのがB.C.4年頃であり，神殿を訪れたのが十二才の時であり，公生涯に入って福音を宣伝しはじめたのは三十才からであるので，第二神殿の修復を始めてからかなりの年月がたっていることと，第二と第三の神殿の年代的区分が明確でないことからであろう．

d）第四に，「年の数により予言された」という表現によって何を述べようとしているのであろうか．これは，ガブリエルがダニエルに告げた「七十週」の予言によることである．即ち，あと七十週すると救い主が来臨し，イ

スラエル民族を罪から解放するであろうということである．ダニエル書9章21〜24節に基いて，パスカルは「ダニエルは云った．天使ガブリエルが自分のところに来て，祈りは聞き届けられた．あと七十週待てばよい．そうすれば，この民は罪から解放され，罪は終りを告げるであろう．そして，聖の聖なる救い主が永遠の正義をもたらすであろう」(fr.692) と述べている．この「七十週」は解釈するのに極めて困難な箇所とされているが，パスカルはどのように解釈するであろうか．彼はダニエル書9章20〜27節を翻訳し，更に註釈を附し，「七十週」についての彼の考え方を明瞭に示している．即ち，「されば汝さとりて知るべし．エルサレムを建てなおせという命令のいずるより，メシアたる君のおこるまで，七週と六十二週とあらん（ヘブル人は数を分けて，小さい数を最初におくならわしであった．さて，この七と六十二であわせて六十九であり，これら七十週のうち第七十週すなわち，最後の七年があとに残る．それについては，彼は次に言及する）．……(中略)……しかるに，彼は一週（すなわち，残る第七十週）のうちに多くの者と契約を結ばん．しかして彼はその週の半ば（すなわち，最後の三年半）に，犠牲と供物を廃し，荒す憎むべき者を驚くばかりはびこらせ，これを驚く者のうえに荒廃のきわみまで注ぎつづけん」(fr.722)「……(……これら七十週のうち第七十週すなわち，最後の七年……」「……その週の半ば（すなわち，最後の三年半)……」等の註釈から，彼が「一週」を七年とみなしていることがわかる．すなわち，パスカルは「七十週」を，七十週年，云いかえるならば，70×7(年)=490(年)とみなしている．E. Young によれば，「七十週」の「週」とは「七」であり，それは「七に区切られた期間」を意味するが，正確な長さを示しているのではない[12]．この点，パスカルは全く異り，七十週を490年と解釈し，時期を正確に示そうとしている．但し，エルサレムの再建命令が出た時から，メシア来臨までが七週と六十二週，と明示されているが，この「七十週」の始期と終期があいまいである．パスカルはこの点を認めて，「予言．——ダニエルの七十週は，予言の言葉なので，始まる時期についてはあいまいである．またその終る時期も，年代記者たちがまちまちなので，あいまいであるけれども，それらすべての相違は，せいぜい二百年以内でしかない」(fr.723) と云っているが，四百九十年に対する二百年は，その差が

大きすぎ，この点については甚だ不正確である．

次に，メシアは如何なる仕方で来臨したであろうか．パスカルは聖書記事に依拠しつつ，fr. 727にそれを列挙し，又，他の多くの断章においても示している．今，主として fr. 727 に基きつつ，概観してみよう．

メシアはユダとダビデの家系から生れるであろう[13]，「ミカ書」5章．彼は幼児として生れるであろう，「イザヤ書」9章．彼はベツレヘムの町に生れるであろう，「ミカ書」5章．彼はおもにエルサレムに現われるであろう．彼は知者と学者を盲目にするであろう，「イザヤ書」6章，8章，29章．貧しき者，卑しき者に福音を伝えるであろう，「イザヤ書」29章．盲人の眼を開き，病人を健かにし，暗黒のうちにありて悩める者を光にみちびくであろう，「イザヤ書」61章．彼は完全な道を教え，異邦人の師となるであろう[14]，「イザヤ書」55章，42章1〜7節．もろもろの予言は不信仰者には理解されないであろう，「ダニエル書」12章，「ホセア書」最終章10節，しかし，よく教えられた者には理解されるであろう．予言は彼を貧しき者としてあらわすとともに，諸国民の主としてあらわしている，「イザヤ書」52章14節，53章，「ゼカリヤ書」9章9節．彼は世の罪のために犠牲となるであろう[15]，「イザヤ書」39章，53章．彼は貴重な礎石となるであろ，「イザヤ書」28章16節．彼は躓きの石，妨げの石となるであろう，「イザヤ書」8章．エルサレムはこの石に躓くであろう．建築師はこの石を棄てるであろう，「詩篇」107篇22節．神はこの石を，隅のおや石となすであろう．またこの石は巨大な山となり，全地を満たすであろう，「ダニエル書」2章．かくして彼は棄てられ，否まれ，裏切られ，「詩篇」108篇8節，売られ，「ゼカリヤ書」11章12節，つばきせられ，打たれ，嘲けられ，ありとあらゆるしかたで苦しめられ，苦汁を飲まされ，「詩篇」68篇，刺され，「ゼカリヤ書」12章，両手と両足を貫ぬかれ，殺され[16]，彼の衣服はくじ引きにされるであろう，「詩篇」22篇．彼はよみがえるであろう[17]，「詩篇」15篇，三日目に，「ホセア書」6章3節．かくして新しい契約がたてられるであろう[18]，「イザヤ書」43章18節．彼は天に昇って神の右に座すであろう，「詩篇」110篇．王たちは彼に反抗して武器をとるであろう，「詩篇」2篇．彼の父の右にあって，その敵にうち勝つであろう．地の王たちおよびよろずの民は彼を拝するであろう，

「イザヤ書」60章．ユダヤ人は民族として存続するであろう，「エレミヤ記」．彼らはさまようであろう．王なく，ホセア書3章，予言者なく，「アモス書」，救いを待ち望みつつもそれを見いだすことがない，「イザヤ書」．イエス・キリストによる異邦人の召命[13]，「イザヤ書」52章15節，55章5節，60章，「詩篇」71篇．

以上の如く，パスカルにとっては，メシアは予言者によって旧約聖書の中に予告されていた仕方によって来臨したのであった（fr. 617, 737）．然し，神選民族であることを自負するユダヤ教徒たちは，イエスにおいてメシア予言が成就されていないと強く主張する．彼らにとっては「メシアはこの世の偉大な君主のはず」（fr. 607）であったが，イエスは「期待されたような光輝につつまれてではなく」（fr. 670），「卑賤な貧しい姿で来臨」（fr. 671）したからである．この問題はむしろ予言解釈の問題であるから，次章でみることにしよう．

パスカルの「予言」の内容は「ユダヤ民族の状態」や「メシア来臨の仕方」に見られるように，聖書記事を歴史的事実として受入れて，その事実に基いて立論しており，「神殿の状態」において見られるようにイスラエル史の史実を，又，「異民族の状態」において見られるように一般世界史の史実をも証拠として用いており，又，「年の数」において見られるように幾何学的方法を予言理解のために縦横に用いている．たしかにパスカルの「予言」論は，今日の批評学の立場から云えば，肯定できない点も多くあるが，聖書を寓意的にしか解釈しなかった当時の一般的傾向と比較するならば，パスカルは実に卓越した理解を示していると云わなければならない．

註

(1) cf. fr. 707, 737.

(2) 「四千年」とは創造からメシア来臨までの期間の，長さを意味しているが，これはパスカルの聖書解釈の一特徴を示していると思う。 B. Warfield ≪*Biblical and Theological Studies*≫ Ch. IX. によれば，創造からメシア来臨までの期間の長さについての解釈には三つある。(1)はこの期間を約四千年とする dispensationalist の解釈であり，(2)はダーウィンの進化論を前提にして途方もない長年月を想定する近代論者の解釈であり，(3)は(1)と(2)とを共に否定し，旧約聖書の系図を研究することによって，(1)の「四千年」よりも長いが，(2)の「途方もない長年月」よりも短い期

間を推定するプロテスタント正統派の解釈である。然し，パスカルの場合は(1)に属するのではなく，彼の幾何学的方法を「予言」理解のために適用した結果が表われているのであろう。dispensationalist の中には様々な主張があって，多くの派に分れているが，その中には黙示文書論者，千年王国論者が含まれている。このような人たちをパスカルは非難している。「黙示文書論者，千年王国論者などのばかげていること」(fr. 651).

(3) cf. fr. 712.「もろもろの予言のなかには，個々のことがらに関するものと，メシアに関するものとが，まじっている」. この他，fr. 711.

(4) ユダヤ民族をイスラエル民族と呼んでいるのは，ここではヤコブと関係があるからであろう。イスラエルとはヤコブの別名であり，彼の子孫はイスラエル民族（或いはイスラエル人）と呼ばれている．ユダヤ民族という呼び名はバビロンの捕囚より本国へ帰った後，用いられるようになった。又，ヘブル民族という呼び名は，アブラハムの先祖の一人であるエルベより出た名で，聖書においては創世記14章13節に初めてアブラハムをヘブル人と呼んでいる．のち，彼の子孫を総称して用いられている。

(5) B. C. 37 年～B. C. 4 年の間，ユダヤの王であった.

(6) cf. fr. 701, 722, 724, 738. など.

(7) cf. fr. 738.

(8) ダニエル書のこと。この書はユダヤの予言者ダニエルを主人公とした黙示文書であって，パスカルはこの書を重要視しており，ある箇所を翻訳したり，引用したり，要約したり，或いは註を附したりしている。「聖書中でダニエル書ほど著者と年代に関して学者間に論争の焦点となったものはない」(「旧約聖書通論」松田明三郎著 183頁）のであって，保守派の学者は予言者ダニエル自身の作であるとし，進歩派の学者はダニエルの著作であることを否定し，B. C. 168～165 年頃の作であると主張している。パスカルはダニエル自身の著作であるとみなしている。

(9) Edward J. Young, *An Introduction to the Old Testament*, p. 364.

(10) 「聖書大辞典」日曜世界社参照。

(11) 例えば，Roger-E. Lacombe, *L'Apologétique de Pascal*, p. 231.

(12) Edward J. Young, *op. cit.* p. 366.

(13) cf. fr. 617, 736.

(14) cf. fr. 733.

(15) cf. fr. 617, 736, 737.

(16) cf. fr. 736, 761.

(17) cf. fr. 838.

(18) cf. fr. 729.

(19) cf. fr. 617, 770, 838.

III

IIにおいてユダヤ民族の間に予言が伝えられてきたことを述べ，そしてその予言は個々に関する予言とメシアに関する予言とからなり，特に後者については，メシア来臨の時期と仕方とに分けて述べてきた．このような予言がユダヤ民族の間に存在していたことは疑う余地のない全く明らかなことである．ユダヤ民族の唯一神と人間の原罪とを結びつけるメシアの待望はユダヤ教の中心的教理であった．それ故，『パンセ』においてもメシアに関する断章が随所に見られるのである．ここで問題になるのは，この待望されたメシアの来臨が果してキリスト教徒の主張するような方法で実現されたか否か，即ち，新約聖書が旧約聖書の約束を実現しているか否かということである．「旧約聖書と新約聖書を同時に証明すること．——この二つを一度に証明するには，一方の予言が他方において成就しているかどうかを見さえすればよい」(fr. 642)．パスカルにとってはメシアがイエスにおいて実現されたことは明らかであった．だから彼は，「彼は人々に完全な道を教えるであろう．そして彼の前にも，後にも，それに近い神的な何ごとかを教えた人は，ひとりも現われなかった[(1)]」(fr. 733) と述べている．

然し，これに対して，直ちに次のような反問がなされるであろう．もしもイエスがかの予言されていたメシアであるならば，何故，旧約聖書の約束を忠実に遵守してきたユダヤ人の大部分がイエス・キリストを信ぜずにいるのであろうか．ユダヤ教徒はメシアの来臨が未だなされていないと主張し，キリスト教徒はイエスがメシア予言を成就したと云う．これが両者を分つ根本的な点である．

この問題は換言すれば，予言に二つの意味があるか否かということであり，予言解釈の問題である．もしもラビ達が云うように，一つの意味しかないならば，メシアが未だ来臨していないというのは真実である．それ故，パスカルは二つの聖書がたがいに証明されなければならぬと云って後，「もろもろの予言を検討するには，それらを理解しなければならない．何故なら，もしもそれらに一つの意味しかないと人が思うならば，メシアが来臨しないであろうということは確かであるが，それらに二重の意味があるならば，メシア

がイエス・キリストにおいて来臨するであろうことは確かだからである．それ故，あらゆる問題は，それらの予言に二重の意味があるかどうかを知ることに帰着する」(fr. 642) と述べている．

そこで，パスカルは予言に二つの意味のあることを示そうと努める．第一の意味は文字的な意味 sens littéral であって，これは字義通りの意味であり，物質的にのみ解釈することである．この文字的な意味は人間の現世的な，又は肉的な欲求を喜ばすので，sens temporel 或いは sens charnel とも呼ばれる．ユダヤ教徒はこの意味を採用してきた．彼らは予言を文字通りに解して，全世界の征服を彼らにもたらす現世的な王としてのメシアを期待した．「ユダヤ人は次のような地上的な考えのなかで年老いた．神は彼らの父祖アブラハム，その肉身，およびそれから出た子孫を愛した．そのために，神は彼らを繁殖させ，他の諸民族から区別し，他の民族と混血するのを許さなかった．彼らがエジプトで苦しんでいたとき，神は彼らのために大いなるしるしを現わし，彼らをそこから救い出した．砂漠において神は彼らをマナで養い，彼らを肥沃な土地に導いた．神は彼らに王たちと立派に出来た神殿とを与え，そこで犠牲をささげさせ，その血を注ぐことによって彼ら自身を清めることができるようにさせた．神はついに，彼らを全世界の主とするためにメシアを遣わすことに定めた」(fr. 670).

第二の意味は霊的な意味 sens spirituel であって，文字的な意味と全く対立している．この意味は sens figuré, sens mystique とも呼ばれる．例を用いて述べるならば，「メシアは彼の民を敵から解放するであろう」(fr. 692) という一節において，もしも敵をエジプト人と解するならば，文字的な意味をとっていることになるが，もしも敵を罪と解するならば，霊的な意味をとっていることになる．後者の場合，約束，或いは聖書の律法や事件の中には，見えないものの象徴である見ゆる一連の現実，即ち，象徴的事物 choses figurantes がある．これは象徴された事物 choses figurées と対立しており，この二つの対立関係は figuratif という語で表わされている．

さて，予言の意味の二重性，云いかえれば，予言が象徴において表わされており，文字的な意味は真の意味でないというパスカルの主張は，そのままでは不信仰者には受入れられないであろう．彼らを説得するには証拠が必

要である．パスカルは fr. 642 においてその証拠を列挙している．「1°．聖書そのものによる証拠．　2°．ラビたちによる証拠．……(中略)……．3°．カバラによる証拠．4°．ラビたち自身が聖書に与える神秘的解釈による証拠．　5°．ラビたちの次のような原理による証拠．……(中略)……．6°．イエス・キリストや使徒たちがわれわれに与える鍵による証拠」(fr. 642)．これらの証拠の中で，　2°〜5°　はユダヤ教徒を対象とする証拠であって，パスカルがキリスト教の弁証を試みる対象としている不信仰者には役にたたない．6°　は問題になっている件をまず承認することが前提されている．　つまり，キリストと使徒たちの神的権威が認められている．これを認めるならば，聖書に二つの意味のあることは直ちに結論される．然し，この神的な権威を認めるか否かが問題である．　1°　は聖書を霊感された神的な啓示としてではなく人間的な記録とみなし，その上でその意味を正しく解こうとするものであって，この証拠は不信仰者に対しても有効であろう．

さて，聖書そのものによってその意味を示そうとする時，パスカルは fr. 659 が示す次の三つの証拠を介入させている．即ち，「旧約聖書は新約聖書の象徴にすぎないということ，予言者たちは現世の幸福によって別の幸福を意味していたということ，それを示すのが次の諸点である．まず，現世の幸福は神にふさわしいものではないであろう．第二に，予言者たちの言説はきわめてはっきり現世の幸福の約束を云いあらわしているが，それにもかかわらず，彼らみずから，その言説は曖昧でありその意味は理解されないであろう，と云っている．……(中略)……第三の証拠として，予言者たちの言説はたがいに相反し，相殺しあっている．……(中略)……」(fr. 659)．

第一の証拠からみてゆこう．パスカルにとっては，旧約聖書は人間的な文学ではなく，神的な啓示の書であるので，そこに記されている事柄は神的な何物かである．旧約における「現世の幸福」という表現は当然，何か神的な意味，即ち，霊的な意味をもっている．さもなければ，超自然的な聖書の神とは相容れないであろう．

この第一の証拠は旧約聖書を神的な啓示と認めているユダヤ人には通用するかもしれないが，予言者を他の普通の人間と同一視し，彼ら予言者は自分勝手に天から霊感をうけたと思込んでいる人々だとみなしている無神論者に

は通用しない．無神論者には，旧約に二つの意味がある証拠を示さなければならない．パスカルはそれを如何に示すであろうか．

予言には文字的な意味だけしかないのか，それとも二つの意味があるのか，これを知るためには，「彼らの云っていることを調べさえすればよい」(fr. 678)．さて，「聖書のうちにあるということを聖書そのものが我々に啓示しなかったような意味を，聖書に帰することは許されない」(fr. 687)．この原理はキリスト教徒にも，又，聖書を詳しく調べる無神論者にも同様に有効である．従って，霊的な意味があるか否かは聖書自体によって決められるべきであり，聖書が述べていない意味を聖書に与えるのは誤りである．ところで，パスカルは「文字的な意味は真の意味ではない」(fr. 687) と云う．それは何故であろうか．

その内容そのものが文字で表わされているならば，予言者たちは文字的な意味以外の意味を我々に語る必要がなかった．然るに，予言者たちは霊的な約束を文字的な意味に託して語っている場合がある．例えば，ダビデが「彼らを敵の手から解放してくれるであろう」と云う時，敵という語によって，罪を語ろうとしている．「メシアはその民を敵の手から解放するであろうというダビデの予言は，これを肉的に解して，それはエジプト人からの解放であろうと思う人があるかもしれない．その場合には，私は予言が成就されるのを示すことができないであろう．しかし，それは罪からの解放であろうと思う人があるにちがいない．何故なら，事実，エジプト人が敵なのではなく，罪が敵なのだからである．それゆえ，敵という語は両義的である．しかし，もしダビデが，事実そう云っているのだが，イザヤやその他の人たちと同様に，メシアはその民を罪から解放するであろう，と他の箇所で云っているならば，両義性は除かれ，敵という二重の意味は，罪という単一の意味に帰着する」(fr. 692)．

しかし，以上のことから「すべてこれらは霊的な意味でなければならぬ」(fr. 683) とは結論されない．如何なる規準によって霊的な意味を決定するのか甚だ曖昧である．そこでパスカルは fr. 659 の残りの二つの証拠を介入させるであろう．「即ち，予言者たちの言説は，きわめてはっきり現世の幸福の約束を云い表わしているが，……(中略)……その言説は曖昧である」とい

う第二の証拠と，「その言説はたがいに相反し，相殺しあっている」という第三の証拠である．

第二の証拠では予言者たちが彼ら自身の言説について述べている告白が提示される．「予言者たちの言説はきわめてはっきり，現世の約束を云い表わしているが，それにもかかわらず，彼らみずから，その言説は曖昧であり，その意味は理解されないであろうと云っている．」 予言者たちのこの告白から，パスカルは次の如く結論する．「この隠れた方の意味は，彼らがはっきり云い表わした方の意味ではなかった．従って，彼らは別の犠牲，別の救い主などについて語るつもりであった．」 パスカルは霊的な意味が隠されており，又，少くとも邪悪な人々には理解されないであろうということをいくつかの断章で指摘している．「神，汝らの眼を覆い，汝らの君の黙示をもつ汝らの予言者の眼をくらまさん[(2)]」(fr.713)． このように霊的な意味が隠されているのは神が隠れたる神であり，又，予言者たちの言説に曖昧さがあるのは彼らが明らかに意図したことであった．「予言者たちはイエス・キリストについて何と云っているか．彼らは明らかに神として来臨するであろうと云っているであろうか．否，そうは云っていない．次のように云っている．彼は真に隠れた神である．彼は無視されるであろう．……(中略)……それは予言者たちが明らかに意図したことである」(fr.751)．

第三の証拠としては「予言者たちの言説はたがいに相反し，相殺し合っている」点が挙げられている．パスカルは彼らの言説が相反していることから真の意味が隠されていることを示そうと試み，いくつかの断章においてその相反を指摘している．「律法は変るであろう．犠牲は変るであろう．彼らには律法もなく，君主もなく，犠牲もなくなるであろう．……(中略)……律法はつづくであろう．この契約は永遠につづくであろう．犠牲は永遠におこなわれるであろう．王権は決して彼らから離れないであろう」(fr.685)．従って，予言者たちが律法や犠牲の語によって意味しているのはモーセの律法やイスラエル人がなした犠牲と同じものだと考えるならば，そこに大きな矛盾が生じるであろう．パスカルは予言者の言説のこの事実を明確に受取って予言解釈の方法を提示する．「それ故，彼らが同じ章句のなかで矛盾するようなことを云っている時には，彼らは別のことを意味していたのである．とこ

ろで，或る著者の云う意味を理解するためには，……．」パスカルの解釈原理は fr. 684 に示されている．「聖書を理解するためには，すべての相反する章句がそこで一致するような一つの意味を捉えなければならない．」

文字的な意味と霊的な意味との相反はどこで一致させられるのであろうか．パスカルは「イエス・キリストにおいてこそ，すべての矛盾は一致させられる」(fr. 684) と云っている．イエス・キリストとは「十字架の死にいたるまで辱しめられた神」であり，「自己の死そのものに打ち勝ったメシア」(fr. 765) である．聖書に予言されていたこのキリストが文字的な意味の下に隠されていた霊的な意味を明らかにし，予言に真の意味を与えるのである．「もろもろの予言は，かっては曖昧であったが，いまではもはやそうではない」(fr. 830)．

註

(1) cf. fr. 729.
(2) cf. fr. 662.「肉的なユダヤ教徒は，彼らの予言のうちに告げられているメシアの偉大をも卑賤をも理解しなかった．」
(3) cf. fr. 678, 686, 765.

IV

IIにおいて，予言の内容を調べ，そのメシア予言を検討した．IIIにおいては，その予言に真の意味を与えるのはメシアであるイエス・キリストであるとしているのをみたが，予言とキリストとのこの関係はどのように把握しなければならないかを，今しばらく述べてみよう．この関係から，予言，即ち，旧約聖書におけるパスカルの一つの重要な傾向を知ることができると思うからである．

これに関するパスカルの考え方を知るのを容易にするために，バルナバ書簡の旧約聖書に対する考え方をクルマンの記述に従って概観しよう．[1]「ある旧約の記事の，一歩深い神学的な意味につきいることを試みずに，バルナバ書簡の著者は無制限に寓喩的な方法を適用して，それぞれの場合に，新約の言葉や形象と同一である，旧約の何らかの言葉や形象をとり出して来るのである．」例えば，「旧約聖書のどこかで，木材や樹木のことがいわれていると，彼は直ちに，ここでキリストの十字架が考えられていると結論する．」「かく

して，バルナバ書簡の著者は，またイエスの生涯の，すべての個々の部分も旧約の中に予表されていることを見出す.」それ故，「バルナバ書簡の著者の考えによれば，旧約は，もはやキリスト以前の時に関する啓示，即ち，キリストにむかう準備の時のそれではなくして，全く，イエスの生涯の出来事そのものの隠された叙述である.」

寓喩的な方法を正しく旧約聖書に適用するならば，福音書の内容が知られるというのであるから，新約聖書の固有の価値は否定されてしまい，又，旧約聖書の救済史的意義も否定されてしまう．パスカルの予言，即ち，旧約に関する考え方はこれとは全く異り，救済史的である．

レルメは『パンセ』に救済史的意図のあることをその著『パスカルと聖書』において示唆している．即ち，彼は『パンセ』の断章を用いて，歴史における神の人類救済の計画を一つの簡単な劇に仕組んでおり，これを「歴史神学劇」le drame historico-théologique と呼んでいる.[2] この劇はプロローグとそれに続く三幕とからなっており，第一幕はイスラエル民族の間にメシア予言が存在すること，第二幕はそのメシア予言がイエス・キリストにおいて成就されること，第三幕はメシアが審判のために第二の来臨をすることを示している．

エチエンヌ・ペリエもこのような救済史的意図について証言している.[3] 彼によれば，『パンセ』の後半部において，パスカルはまず読者の眼をユダヤ民族に向けさせ，そこに独自の書物，即ち，聖書があることに注目させる．旧約聖書の中には，創造主である神がおり，この神が人間と自然を創造したこと，人間は創造された時の栄光の状態から堕落して罪におちたこと，この罪から人類を救うため，神はメシアを与えることをユダヤ民族に約束されたこと，神は人類のために一人のメシアをつくり，このメシアは人類に代って贖いをなすであろうと予言されたこと，又，新約聖書では，メシアはイエスにおいて来臨し，彼の人格，奇蹟，教え，生涯の事情が記されている．これらのことから人類救済の業が成就されたことを知らせようとしている．ペリエは次のようにさえ云っている．「結局，パスカルは，福音書そのものについて，福音書の著者たちの文体について，彼らの人格について，特に使徒たちについて，彼らの文書について，驚くほど多数の奇蹟について，殉教者た

ちについて，聖徒たちについて，要するに，キリスト教が完全に成立するまでに経てきたすべての道程について，きわめてすぐれた考察を下すことによって，福音の歴史の真理に役立ちうるものは何ひとつ忘れなかった[(4)]」と．

『パンセ』における予言は，レルメが示唆し，ペリエが証言している救済史の中に位置し，そしてあらゆる予言は歴史の中心であるイエス・キリストに向って準備され，集中されている．前述の「歴史神学劇」においてレルメは第一幕を次のように構成している．「その原罪にもかかわらず，神は堕落した人類に救い主を与えることを約束する．彼はその約束を族長たちにくり返し，旧約の主要な登場人物のうちにメシアの象徴を与えている．そして予言者たちにメシアを予言させる[(5)]．」メシアに関する予言だけでなく，個々に関する予言もイエス・キリストに向って準備されている[(6)]．ユダヤ民族が保持してきたこの旧約は，イエス・キリストの来臨の時間的な準備とみなされる点にその存在理由をもつものであり，バルナバ書簡の著書の云う如く，同一の事柄を別の形で書き記されたものと見られたからではない．このように旧約は人類救済の歴史において新約と異った重要な部分をになっており，この両者は準備と完成の関係であらわされることができる．「イエス・キリスト．二つの聖書は，旧約はその待望として新約はその模範として，いずれも彼をその中心とみなしている」(fr. 740)．

さて，準備である予言を解く鍵は既にⅢでみた如くイエス・キリストにある．イエスは十字架にかかり，罪を贖った．「イエス・キリストは彼らの精神を開いて聖書を理解させた．二つの大きな開示は次のようなことである．一，あらゆる事物は，彼らにとって，象徴として起った．『真のイスラエル．』『真の自由．』天よりの真のパン．二，十字架の死にまで辱かしめられた神．キリストはその栄光に入るためには苦難を受けなければならなかった」(fr. 679)．このキリストによらなければ，予言の真の意味は理解することができない．「イエス・キリストによる神．——われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る」(fr. 547)．かくして，パスカルにおいては，中心であるイエス・キリストは旧約において予言せられ，そのイエスが旧約を解くという相互に支持し合い，解釈する関係にあり，共に救済史において重要な位置を占めている．以上がパスカルの『パンセ』における予言とキリストとの関係の素描

である.

註

(1) Oscar Cullmann, ≪*Christ et le temps*≫ p. 94. 邦訳, 前田護郎訳「キリストと時」p. p. 123～124.

(2) J. Lhermet, ≪*Pascal et la Bible*≫ pp. 416～417.

(3) E. Périr, *op. cit.* pp. 305～308.

(4) E. Pérer, *op. cit.* p. 308.

(5) J. Lhermet, *op. cit.* pp. 416～417.

(6) cf. fr. 712.